



がんばっています！

No.56

「畑は居心地のいい場所」



岸田 真季 さん
(柳原地区・藤ノ木)

岸田さんは、木島地区の花弁農家での研修を経て、ご実家の農業を引き継ぎ就農されました。路地野菜と花の栽培をがんばっています。ヒメヒマワリが満開の畑でお話を伺いました。

Q 農業を継ぐきっかけは？

A 生活の中で常に自然や季節を感じられる農業の仕事にずっと魅力を感じていました。小さな頃は嫌々手伝いをしていた思い出もあ

りますが、私にとって畑は居心地のいい場所でした。父が高齢になったこともあり、今後、誰も耕作しなくなつて、この畑が無くなつてしまうのは嫌だな、という思いが強くなりました。4年前に農業を継ぐことを決め、今は家族でシャクヤクやヒメヒマワリ等の花とズッキーニの栽培をしています。

Q 一日の仕事内容は？

A 朝は収穫、午後は除草

等の畑の管理と荷造り作業です。外仕事は私と父で、荷造り作業は母とパートさんに手伝ってもらい、分担しながらやっています。

花卉農家さんの元で研修させてもらったこともあり、花の栽培にもっと力を入れていきたいと考え、現在はソリダコなど電照を用いた栽培を始めています。

Q 農作業で大変なことは？

A 計画を立てて作業をしていかないと、次から次へと湧き出てくる作業に対応できなくなつてしまい、大変です。トントン拍子で効率良く進めるのは苦手なことなので苦労します。恥ずかしながら草畑にしてしまうことも多いです。

Q やりがいは？

A 農産物の栽培方法を試行錯誤するのは楽しいです。「ああ失敗しちゃったな」とか、「なんだか出来がいいぞ」とか。小さなことに一喜一憂をして、毎日

充実しています。

Q 今後目指すこと

A 病害虫被害を出してしまつたなどの失敗もありましたので、まずは安定した生産ができるようになります。

地元の農家の先輩方は、力を合わせて農産物のレベルアップをすることで、産地全体の成長を考えている方が多く、私のような新人も温かく育ててくれる雰囲気を感じています。そのため怖がらずに新しいことに挑戦することができています。

この地域柄を大事にしながら、地域を盛り上げていかれるようになりたいです。



▲ヒメヒマワリは小さくてかわいい

お知らせ



(農地パトロール)
農地利用状況調査を実施します

農業委員会では農地の確保と遊休荒廃化の防止を目的として、農地の利用状況調査(農地パトロール)を実施します。農地への立ち入りなどにご理解とご協力をお願いします。【調査の期間 7月から10月まで】

木島地区の地域計画の取り組みについて

木島地区農業委員 岡田 忠治

木島地区の農地は、水田が263ヘクタール、畑が70ヘクタールあります。山沿いを除いて、平坦でとても優良な農地になります。

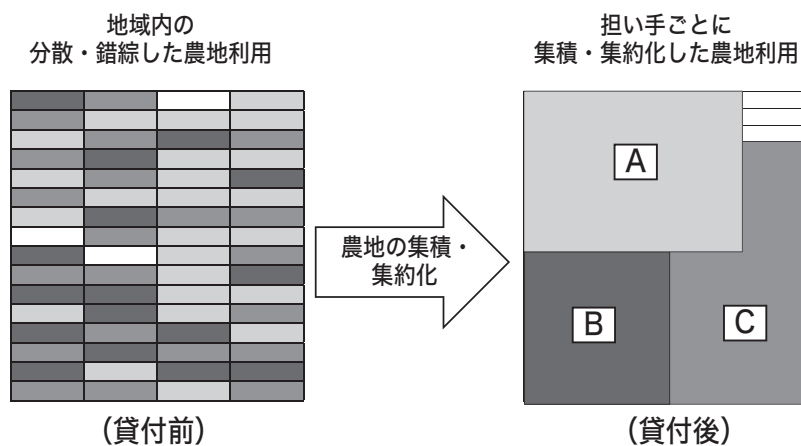
今年4月に、木島地区区長会の協力のもと、農地利用意向アンケートを木島地区全戸を対象に実施しました。同様なアンケートは5年ほど前にも行い、今回、2度目のアンケート調査になります。集計結果はまだ出ていませんが、今後、木島地区農業再生センターで地区の農地(農業)をどのようにしていくか、地域の皆さんとの話し合いの実施を予定しています。

『地域計画』とは、地域の農業者が中心となり、地域の将来の在り方や、農地の集約化などの目標を定めるものことです。これは、今後の農業界の変化を見据えた大事な取り組みになります。昔からの農業から脱皮し、新しい産業としての農業を進めて行くために、農地の集約化はとても

重要です。水稲栽培を例にすると、木島地区のは場整備が今から60年近く前に実施され、一区画30アールになり農業機械の導入で水稲栽培が合理化されました。この合理化で10分の1程の労力で栽培が出来るようになりました。

今、農業界で問題になっているのは農家の減少です。畑作での作業は手でやらなくてはならない作業もありますが、機械で出来るものも多々あります。農業従事者の減少を補うため、機械化で効率を図っていかなければならぬ時代がやって来ます。この機械導入に必要なのは区画の広さです。私たちの時代で実現できるか分かりませんが、次世代の農業従事者のために農地の集約化を考えて行かなければなりません。木島地区にはこの次世代の農業者は少なからずいます。農地でお困りの方はぜひ木島地区農業再生センター

集積・集約化のイメージ



農地の色は、個々の耕作者を示します。

農地の集積・集約化で農作業の効率化やコスト削減が可能、規模拡大による生産効率が上がる。

あしあと

5・6月の活動記録

5月9日 農業委員会役員会
26日 5月農業委員会総会
〃 情報委員会
6月9日 農業委員会役員会
26日 6月農業委員会総会

シリーズ

地域計画 — 地域の農業を守る —

『地域計画』とは…

10年後、地域の農業をどんな農業にしていきたいか、大切な農地を、どう守り、次の世代につないでいくかを地域の(そこに住んでいる)農業関係者等で話し合い、目指すべき将来の農地利用の姿を明らかにする計画です。